

## 全眞道士姬志眞著 『知常先生雲山集』 について

脇山 豪

### 一、はじめに

金元代の全眞教道士である姫志眞の著作に『雲山集』があり、これは『正統道藏』をはじめとする各種『道藏』に收められている。一方で中國國家圖書館は『道藏』本と内容の異なつた元刊の『知常先生雲山集』の殘卷を保有しており、中華書局よりその再造善本も出版されている。<sup>1)</sup> 『知常先生雲山集』には従來の『道藏』本『雲山集』には見られない豊富な思想文獻が收録されており、全眞教思想史を考える上で非常に重要であるもの

の、その知名度や研究における活用度合いは低く、本邦では僅かに三浦秀一氏が一九九六年に「金元の際の全眞教―范玄通・王棲雲から姫知常へ―」という論文、及び二〇〇三年の著書『中國心學の稜線―元朝の知識人と儒道佛三教』で言及した程度であり、その文獻學的な検討などはいまだ行われていない。中國大陸でも長らく顧みられてこなかつたものの、二〇一七年には武漢大學の左丹丹氏が「元代全眞道士姫志眞《雲山集》研究」という碩士論文に『知常先生雲山集』を利用し、二〇一八年には張廣保氏が「全眞教史家姫志眞及元仁宗延祐六年《雲

山集』的史料價値<sup>③</sup>」という論文を發表しており、その基本的な情報<sup>④</sup>が解説されている。

本稿ではその成果に加え、『知常先生雲山集』を今後重要な史料として活用するための前段階として、先行研究が言及しなかったテキストの來歴の詳細や明鈔本の存在を明らかにし、より多様な情報を提供することを目的とする。

## 二、『知常先生雲山集』の著者姫志眞

姫志眞（西曆一九二―二六七年）は十三世紀に金朝支配下、のちモンゴル帝國支配下の河南地域で活動した全眞教の道士であり、王志謹の高弟、つまり七眞の一人である郝大通の再傳であり、開祖王重陽三傳の弟子である。王志謹よりその教門を任されており、これをして太古棲雲門下の初代領袖と言える。太古棲雲門下とは、郝大通（太古）及びその高弟の王志謹（棲雲）の弟子筋に當たる諸道士といった意味で、姫志眞本人が存命中にこの呼稱を使用した形跡はないものの、少なくとも第三代

領袖である徐志根の頃には定着していたようである<sup>④</sup>。また様な史料から太古棲雲門下の教門は初代領袖の姫志眞から第四代孫履道まで、姫志眞、李志居、徐志根、孫履道の順に受け継がれたことがわかる<sup>⑤</sup>。

『知常先生雲山集』巻五に附されている「知常眞人行實」<sup>⑥</sup>によれば、姫志眞はもと儒士であったが、モンゴル帝國との戦亂の中で道教に身を投じ、王志謹との出會いを經てその門下となった人物である。一二五四年以降は汴梁の朝元宮を據點とし、一二六三年の王志謹逝去後はその教門を繼いで多くの道士らを管轄していた。

王志謹の門下はその後河南地域に独自の勢力を持つこととなるが、王志謹の亡き後を支え、その礎を築いた人物として姫志眞の果たした役割は大きいと言える。

## 三、『雲山集』及び『知常先生雲山集』

姫志眞の文章のうち、『雲山集』の名を持つものは大きく分けて二つある。

一つが現在『道藏』に収録されている八卷本の系統で

あり、本稿ではこれを『雲山集』と呼ぶ。もう一つは殘卷が残っている五卷本の系統であり、これを『知常先生雲山集』と呼び分ける。なお、本稿では『雲山集』と『知常先生雲山集』を呼び分ける特別な必要が無い際や、ふたつを總稱する際にも『雲山集』の呼稱を使用する。

現在確認できる『雲山集』のテキストは次の通りである。

(1) 『正統道藏』本『雲山集』

『正統道藏』本『雲山集』は『正統道藏』太平部、卷二十五、兄字號に收められており、全八卷。冒頭に裴憲による序と王鶚による序がある。各卷に収録される内容は次の通りである。

卷一、「賦」二篇、「七言古調長篇」十二篇、「五言古調長篇」十四篇、「七言律詩」三十三首

卷二、「七言律詩」一百八首

卷三、「五言律詩」三十六首、「長短句」十九首、「七言

絶句」八十三首

卷四、「七言絶句」六十八首、「六言絶句」二十五首、

「五言絶句」二十三首、「跋」一篇

卷五、「詞」七十三首

卷六、「詞」九十首

卷七、「碑記」八篇

卷八、「碑記」五篇

(2) 『道藏輯要』本『雲山集』

『道藏輯要』本『雲山集』は『道藏輯要』第十八帛集、第六に收められている。『雲山集』に限らず廣く『道藏輯要』に見られる特徴であるが、『正統道藏』では八卷本だった内容を一卷にまとめており、また、乾隆帝までの清朝諸皇帝の諱、及び孔子の諱である「丘」字の避諱に對應している。なお、これを受け継いだ『重刊道藏輯要』では新たに道光帝の諱である旻寧の「寧」字を避けるよう修正が加わっている。

(3) 元刊本『知常先生雲山集』殘卷

○概要

元刊本『知常先生雲山集』は五卷本であるが、現存するものは卷一と卷二を缺き、卷三から五までの三卷のみ

である。

このテキストの巻五の最終葉の裏面には「一部五本洪武三十五年正月十九日朝天宮道士姚孤雲進到」との墨書があるほか、章鈺の識語が書かれた原稿用紙が附されている。

○元刊本と『道藏』本の異同

元刊本巻三の収録内容は『道藏』本巻五・六に一致しており、また、元刊本巻四の収録内容は『道藏』本巻七・八とほぼ一致している。

『道藏』本の巻七・八は合計で十三篇の碑記を収録しているが、元刊本巻四はそれに加えて「滑州悟眞觀記」「濱都重建太虛觀記」「滎陽修建黃籙大醮記」の三篇が多く、十六篇を収録する。

一方で、元刊本巻五に相當する内容は『道藏』本には一切見られない。その内容は順に「論」七篇、「門」五篇、「銘」七篇、「説」七篇、「評」七篇の計三十三篇に加え、巻末に朱象先による後序、および「知常眞人行

實」を収録している。

この他、先行研究<sup>⑤</sup>も指摘する通り、『道藏』本と元刊本の相違点としては次の各点が挙げられる。

・元刊本「雨中歌其三」は下に「僕自驢屑東遊、玲竅宛輒、十有餘年、杳絕山陽。一日表弟不厭披榛、垂顧蓬華、就審舅氏、兼庇玉屬無恙、惘然猶疑夢間。於是亂道「雨中花」詞奉寄。」と序題があるが、『道藏』本にはない。

・元刊本「鵲橋仙其十一贈大方時在共城」の題が『道藏』本では「鵲橋仙其十一贈大方丈檀城」となっている。

・元刊本「終南縣梁家莊棲雲觀碑」の題が『道藏』本では「終南山棲雲觀碑」となっている。

・元刊本「洛陽棲雲觀碑」の題が『道藏』本では「洛陽棲雲觀碑」となっている。

・元刊本「咸寧縣夏侯村清華觀碑」の題が『道藏』本では「咸寧清華觀碑」となっている。

・元刊本「鄆陵縣黃籙大齋之碑」の題が『道藏』本では

「鄗陵黃籙大齋之碑」となっている。

・元刊本「京兆普濟孤魂碑」の題が『道藏』本では「京兆普度碑」となっている。

・元刊本「黃籙大齋薦父之碑」の題が『道藏』本では「黃籙大齋碑」となっている。

・元刊本「屯莊南昌觀碑」の題が『道藏』本では「南昌觀碑」となっている。

#### ○テキストの來歴

元刊本『知常先生雲山集』には、この本の輾轉の由來を記した章鈺（一八六五—一九三七）による識語（註）が記された原稿用紙が附されている。

元刊本の來歴に係る部分を抜粹して譯すと次のようになる。

……一九一二年冬、元刊本『知常先生雲山集』の卷三・四・五が北京の琉璃廠に流れてきた。明人の墨書から考えるに、これは南京から北京へと移されてきたものであろう。顧起元『客座贅語』に、

全真道士姬志眞著『知常先生雲山集』について

「永樂辛丑（一四二二）、南内文淵閣に所藏する書籍から一部を取って北京へ送るよう敕が下る。脩撰の陳循は規定の數に従って百櫃を選びだし、これを一艘の舟に載せて送った。」とある。これはそのうちの一つであろう。……朝天宮は今の江寧府學であり、……明代に朝天宮の名となった。

……朝天宮の道士は朝廷との交流があったようであり、……仁和吳氏（吳昌綬）がこの三卷の影印を『景刊宋金元明本詞四十種』に收入した。一九一三年夏至、長洲の章鈺、津門の僑寓にて。

この本ははじめ朝天宮の藏書であり、また裏面の墨書によると五卷本の完本であったが、一四〇二年正月、副都南京に進呈され、一四二一年、北京へと送られる。その後は宮中に祕藏されたまま清朝にも繼承され、しばらく世に出ることはなかったが、一九一二年に卷一・二を缺く形で琉璃廠に流出し、章鈺に入手されたことがわかる。

實際に目録を確認してみると、光緒末年（一九〇八年）劉啓瑞の編纂とされる『内閣庫存書目』<sup>(10)</sup>には「知常先生雲山集 元釋姬翼撰 存抄本卷三、四、刻本卷三、四、五 存五本」とあり、誤つて釋家としているものの、この元刊本『知常先生雲山集』と後述する明鈔本の記載が見える。ここから、元刊本は内閣大庫に收められていたこと、また、恐らくそこで鈔本が（巻五を除いて）作成されたことが分かる。

清の内閣大庫の藏書を引き継いだとされるのは京師圖書館であるが、一九一二年から一九一三年頃、江瀚の編集である『京師圖書館善本簡明書目』には「知常先生雲山集四卷 清内閣書 元道士呂知常撰 舊鈔本 存三之四」<sup>(11)</sup>とあり、この時期既に元刊本は流出しており、明鈔本のみが繼承されていたことが分かる。章鈺は一九一二年冬に流出した元刊本を發見しているので、この情報の正確性は高い。また、章鈺は流出したと言っているが、或いは自身が内閣大庫から持ち出したのかもしれない。

『中華再造善本總目提要』にある汪桂海の提要による

と、潘宗周（一八六七—一九三九）の『寶禮堂書目』に書名が見え、一九五一年に潘氏が藏書を國家へ寄附し、現在では中國國家圖書館の所藏となつていている<sup>(12)</sup>。實際に『寶禮堂宋本書録』を確認すると、「知常先生雲山集殘本 三册」<sup>(13)</sup>とその書名が見える。ここから、國家の手に渡る直前は潘氏の所藏であつたことがわかる。

藏書印を確認すると「北京圖書館藏」印が捺されているほか、「人間孤本」「侍兒文雲掌記」「克文之璽」「寒雲主人」<sup>(14)</sup>「雲合樓」「寒雲祕笈珍藏之印」などの印も捺されており、これらはすべて袁克文（一九八〇—一九三二）の印である<sup>(15)</sup>。

また、「惠后借觀」（原表記ママ）の印も確認される<sup>(16)</sup>。これは清末の高世異（生卒年不詳）の印と思われ、「借觀」とあるので自己の所有物としたわけではないが、一時的に手にしていたことがわかる。

したがって、章鈺から潘宗周の手に渡るまでの間に袁克文の手にあり、また一時的に高世異の手にも渡つていたことがわかる。

袁克文は元刊本『知常先生雲山集』に對して題跋や刊記を附していないようであるが、『寒雲日記』第一四六頁にこれに關する記事が出ており、袁克文は一九一五年八月初八日に元刊本『知常先生雲山集』を入手したようである。

袁克文から潘宗周に至る輾轉の過程は不明であるが、前述したものの他に藏書印がないことや、元刊本『知常先生雲山集』を記載する目録がないことから、そう多くの人の手に渡ったわけではないと推測される。

(4)明鈔本『知常先生雲山集』殘卷(明烏絲欄鈔本知常先生雲山集)

明鈔本の『知常先生雲山集』は北平圖書館(現中國國家圖書館)舊藏で、現在では臺灣に移っており、臺灣國家圖書館がマイクロフィルムをインターネット上で公開している。<sup>(20)</sup>

その由來は先ほど確認した通り明代に宮中に入った元刊本を鈔寫したものであると思われる。元刊本が一九一

二年に流出したのに對し、こちらの鈔本は京師圖書館へと繼承され、一九二八年の北平圖書館への改名を経て、現在では臺灣國家圖書館の所藏となっている。日中戦争期から國共内戦期の動きはよくわかっていないが、臺灣の手に渡っていることから日中戦争期に米國へ疎開していた藏書であるかもしれない(それらの藏書は國共内戦後に中華人民共和國ではなく中華民國へと返還された<sup>(21)</sup>)。

ちなみに、臺灣國家圖書館は先述の『京師圖書館善本簡明書目』のように書誌を「(元)呂知常撰」と誤って記録しているが、これは呂知常ではなく姬知常(姬志眞)の撰である。

明鈔本は卷三、卷四が殘されているが、その内容はおおよそ元刊本『知常先生雲山集』の卷三、卷四と一致しており、ここからも『道藏』本の系統ではなく元刊本の系統にある鈔本とわかる。五卷本に基づきながらも卷一・二が存在しないあたり、北京に入っただけではなくそれらが失われていたことが推測される。また、卷五が寫されなかったのはその高い思想性からであろうか。序

跋の類は書きこまれておらず、これ以上のことは現状わからない。

界線、罫線が引かれており、一葉あたり九行の構成で、一行あたりの文字数は、詩文を収録する巻三は一行十八字で安定しているが、碑文を収録する巻四では一定せず、一行あたり二十字前後でばらついている。字様からも巻三は丁寧なことに比べて巻四は速記を意識したかのような感がある。また、元刊本と『道藏』本で異同が確認された九點は、すべて元刊本と同じように作っている。元刊本と異なる點としては、巻四所收の「長春眞人成道碑」において一部の記述が前後しており、欄外上部に墨書でその旨が注記されている。また、巻四は全體的に字様が亂雑だが、あまりにも崩れた字や誤字などは欄外に書きなおされている箇所がある。本来であればその一一を元刊本及び『道藏』本と校勘し校勘記を作成したいところではあるが、今回はこの程度の言及に留めておく。

#### 四、『雲山集』成立の経緯

『道藏』本『雲山集』には先に裴憲の、次に王鶚の序が附されている。また、元刊本『知常先生雲山集』には朱象先による後序がある。

○裴憲序について

裴憲の序<sup>(2)</sup>には、

庚戌夏五月、友人論伯瑜至自相臺、話舊之餘。忽出『知常先生文集』一編、將以板行垂世、且索序引。

とあり、庚戌（一二五〇）五月に裴憲の友人（であり姫志眞の道友でもある）論伯瑜が相臺（今の河南省安陽市）から訪ねてきて、『知常先生文集』一編を取り出し、これを出版する意志を述べ、その序文を求めてきたらしい。また、末尾に「七月一日綠野雲孫長安裴憲子法引」とあることから、この序は一二五〇年七月一日に附されたものであるらしい。

○王鶚序について

王鶚の序には<sup>(23)</sup>

其賦・詩・歌・論・碑・記・雜文、娓娓可觀。號

『雲山集』。長安裴憲子法已敍之於前、其友李君提

舉復求余說綴於後。余與知常有平昔之好、嘗爲作

『易解』後序、今何辭焉。歲旃蒙赤奮若、慎獨老

人東明王鶚百一序。

とある。歲旃蒙赤奮若とあるからこれは一二六五年のものであり、裴憲の序の段階では『知常先生文集』という書名であったものを、王鶚が『雲山集』と命名したとされる。またこの序文を王鶚に求めたのは、提舉の地位にあった「李君」と呼ばれる人物であったとされる。

○朱象先後序について

朱象先の後序には<sup>(24)</sup>

嗣教天遊真人、宗教提點邢君珍藏是書久矣。不欲

獨善、命迎祥提點李懷素刻梓傳世。延祐己未歲元

日、一虛叟朱象先摯手書于道祖說經之臺。

とあるから、延祐己未歲（一二一九）元日に朱象先が終南山にて記したものである。この際の底本は天遊真人（孫履道、號は天遊）と宗教提點邢君（邢道正）が長い間保管していた本であり、それを迎祥提點（王志謹の影響下にあった京兆迎祥觀提點のことか）の李懷素に命じて再版させたものである。

この一三一九年の再版は一二六五年の出版から實に五十四年経過しているが、その書きぶりから一三一九年當時、既に貴重な書物であったことがわかる。姫志眞の跡を繼ぐ者として、孫履道・邢道正がこのような貴重な書物を保管することも合理的である。

○『雲山集』の成書年代について

張廣保「全眞敎史家姫志眞及元仁宗延祐六年《雲山

『道藏』本・元刊本『雲山集』どちらにも収録されていない碑記の存在を指摘している。<sup>(25)</sup>一覽にしてみると次のようなものが該当する。

- ・「創建清夢觀碑」中統二年（一二六一）九月二十三日
- ・「高良太清觀碑」壬戌（中統三年（一二六二））冬十月望後二日

・「無爲抱道素德真人夏公道行碑記」中統四年（一二六三）正月

・「大元國寶峯觀記」至元三年（一二六六）

・「大朝曲陽縣重修眞君觀碑」至元五年（一二六八）

張廣保はこれら碑記の列擧と各文章の説明に留まっているが、ここからもう一步踏み込んだ假説を立てたい。

すなわち、『雲山集』は一二六〇年時点で成立し、それ以降、王鶚が一二六五年に序を附すまで増補はされていないという説である。

その證據として、張廣保が指摘した『雲山集』に収録されていない各種碑記はすべて一二六〇年（あるいは一

二六一年）以降に姫志眞が撰述したものであること、及び、『雲山集』が収録する文章のうち、年記が確認できるものはすべて一二六〇年以前のものであることが挙げられる。

また元刊本『雲山集』巻五の冒頭、「玄教龔明論并序」は題の通り姫志眞による序が附されている。序には「歲次庚申中元日、夷山知常子姫志眞序。」とあり、庚申（一二六〇）の中元（舊曆七月十五日）のものとなる。

假に『雲山集』が一二六〇年までに完成していたと見ると、この序は編集過程の最終盤に附されたものであることがわかる。すなわち、弟子筋があらかた編纂を終え、最終的に出版するにあたり、改めて『雲山集』（當時の題は『知常先生文集』）の眼目となる巻五冒頭に序を求めたと考えることができる。

また『雲山集』の編纂が姫志眞の在世中に行われていたことは明らかだが、さらに先述のように姫志眞が序を附していることから、姫志眞本人による監督も大なり小なり行われたはずである。だからこそ、一二六〇年以降

成立の碑記には収録漏れがある一方で、反対に一二六〇年以前に成立した碑記のうち、『雲山集』に収録漏れが存在しない（未だ発見されていない）ことの説明にもなりうる。ここから、成立年不詳の碑記に關しても『雲山集』に收められている限りでは一二六〇年以前の撰述であると判断できる。

元刊本『知常先生雲山集』には次のような碑記が收められている。（収録順、前三篇は『道藏』本も収録、題に異同がある場合は元刊本の表記に従う）

- ・「重陽祖師開道碑」
- ・「終南縣梁家莊棲雲觀碑」
- ・「洛陽縣朱葛村棲雲觀碑」 憲宗元年（一二五一）
- ・「盤山棲雲觀碑」
- ・「高唐重修慧冲道觀碑」 憲宗六年（一二五六）五月
- ・「長春真人成道碑」
- ・「咸寧縣夏侯村清華觀碑」
- ・「鄆陵縣黃籙大齋之碑」
- ・「京兆普濟孤魂碑」 己未（一二五九）冬十月以降

全眞道士姬志眞著『知常先生雲山集』について

・「黃籙大齋薦父之碑」

・「屯莊南昌觀碑」

・「巢雲遇眞記」

・「開州神清觀記」 憲宗七年（一二五七）一月二十日

・「滑州悟眞觀記」 憲宗七年（一二五七）三月

・「濱都重建太虛觀記」

・「滎陽修建黃籙大醮記」 己未（一二五九）以降

このように、十六篇中十篇の成立年代は明記されていないものの、これらも一二六〇年以前の成立の可能性が高い。また、論の自序が一二六〇年に附されているからといって、卷五部分が一二六〇年の成立かというところ、それも正確ではない。一二五〇年の裴憲序に「至於賦・評・論・記・銘・敍・歌・詩」とあることから、一二五〇年の『知常先生文集』時點で既に評や論、銘などの元刊本卷五所收の内容も完整されているかは別にして、ある程度成立していたようである。

以上を整理すると、一二五〇年までに論伯瑜の手により一旦成立した『知常先生文集』は、一二五〇年に裴憲

より序を賜ったのちも増補された。そして一二六〇年の時点で完成し、姫志眞によって自序が附された。その後、一二六五年に王鶚によって序と『雲山集』の名が與えられ、出版された。以降、時間と共に『雲山集』は貴重書となり、一三一九年、孫履道と邢道正によって再版事業が命じられ、李懷素主導で復刻が行われ、朱象先が序を附し、再版が果たされたと言える。

## 五、おわりに

以上、未だ注目度が低い『知常先生雲山集』に關して、その成書年代や流傳の経緯について考察した。『知常先生雲山集』は單なる稀覯本ではなく、元刊本の卷五には豊富な思想文献が收められており、從來史料の不足により知り難かった十三世紀中葉の全眞教思想や王志謹の教説の發展の様子を窺い知ることができる重要な史料である。また、卷五の内容に目を通した筆者の所感としては、姫志眞の教説には朱子學的な發想や従來の道家道教系の理論が入り込んでいることが推察され、今後さらなる研

究により全眞教思想史の大きな捉え直しが期待できるだろう。

なお、瑣末なことだが、『雲山集』には「論經」と題された詩と、「送趙子眞送藏經于朝廷」と題された詩がある。しかしこの詩は南宋の王質『雪山集』にもほとんど同じものが見える。ここから『雪山集』の編纂過程において兩者の混同があつたことが指摘できる。

## 註

- (1) 姫志眞『知常先生雲山集(全三冊)(中華再造善本)』、北京圖書館出版社、二〇〇五年。
- (2) 三浦秀一「金元の際の全眞教―范玄通・王棲雲から姫知常へ―」『東北大學文學部研究年報』四五、一〇五―一三五頁、一九九五年。
- (3) 張廣保「全眞教史家姫志眞及元仁宗延祐六年《雲山集》の史料價值」『世界宗教研究』一七二、九八―一〇四頁、二〇一八年。
- (4) 徐志根が「本宗掌教」を務めていた一二八五年立石の李謙「崇寧葆光大師衛公道行之碑」碑陰の宗派圖(管見の限り現在國內から確認する方法は存在しないように思われるが、趙衛東・王光福『王志謹學案』一九一頁な

どで釋文が確認できる)には「棲雲門下提點兼諸路道教提點師棲眞大師趙志恆」との記名が見える。現在確認できる太古棲雲門下という呼稱の初出は至大三年(一二三二〇)立石の劉致「追表孫氏世系官爵墓碑銘」(周大儒修『虞鄉縣志』卷十一三八—四一葉)にある「都提點太古棲雲掌教十數餘年」という記述である。

(5) 代表的な史料が許有壬「龍德宮記」(陳垣編『道家金石略』(以下『金石略』)、文物出版、七八〇—七八一頁)であり、郝大通から王志謹、姬志眞、李志居、徐志根、孫履道と教門が繼承される様子が見える。ほかにも姚燧「天寶壇記」(李修生主編『全元文』卷三〇七、四七〇—四七一頁)や劉將孫「汴梁路棲雲觀記」(『金石略』六四六頁)、程巨夫「徐眞人道行碑」(『金石略』七一—七二—三頁)、王之綱「玉清觀碑」(『金石略』六六四—六六五頁)、姚燧「重修中太一宮碑」(『金石略』七二三—七二四頁)など、幅廣い資料から確認できる。

(6) 姬志眞「知常先生雲山集」卷五、第五三—五四葉。なお、『甘水仙源錄』卷八にはほぼ同じ内容の「知常眞真人事蹟」(『道藏』十九册七九二—七九三頁)が見える。

(7) なお、姬志眞は王志謹との邂逅以前、南宮寓居の時点で既に道教(全眞教かどうかは定かではない)に入門していたようである。裴憲「雲山集」序にて「先生世本澤郡名族、幼讀書習儒業。業成涉大變、因歸玄教。」と

あり、戦禍に遭ってから道教に歸依したことが読み取れる。また、姬志眞「雲山集」所収の「玄門」詩に「身在玄門四十年」という文句がある。本稿でも指摘する通り、『雲山集』は一二六〇年までに成立しているため、四十年を概数と考えても、少なくとも一二二〇年前後に道教に身を投じたこととなる。

(8) 張廣保「全眞教史家姬志眞及元仁宗延祐六年《雲山集》の史料價值」など。

(9) 壬子冬間、殘本三・四・五、三卷流轉都門廠肆。以明人墨書一行考之、知此書明初先入南京後歸北京。顧起元『客座贅語』云「永樂辛丑敕南內文淵閣所藏書籍各取一部送至北京。脩撰陳循如數檢得百櫃、督一舟載之。」此集即百櫃中一種。……朝天宮今爲江寧府學。……逮明及有朝元宮之名。……歲首進書足備南都雅。……仁和吳氏雙樓樓刺取『詞集』影刊爲疏記大槩於後。昭陽赤奮若夏至節 長洲章鈺 津門僑寓。

(10) 高橋智「内閣庫存書目について—中國版本學資料研究—」『斯道文庫論集』第四十六輯、二七九頁、二〇一年。

(11) 同右、三二六頁。

(12) 高橋智「京師圖書館善本簡明書目・稿本について—中國版本學資料研究—」『斯道文庫論集』第四十七輯、八二頁、二〇一三年。

- (13) 『中華再造善本總目提要』金元編、國家圖書館出版社、二二二頁、二〇一二年。
- (14) 『寶禮堂宋本書錄』「元本附」第五・六葉。
- (15) 姬志真『知常先生雲山集』卷三第一葉表、卷五第五五葉裏。
- (16) 「人間孤本」卷三第一葉表、「侍兒文雲掌記」卷三第一葉表、「克文之璽」卷三第一葉表、卷四第一葉表、卷五第一葉表、「寒雲主人」卷三第一葉表、卷四第一葉表、卷五第一葉表、「雲合樓」卷五第五二葉裏、「寒雲祕笈珍藏之印」卷五第五五葉裏。
- (17) 李紅英編『寒雲藏書題跋輯釋』上卷「寒雲藏書引鑑」二一・一五頁、中華書局、二〇一六年。
- (18) 姬志真『知常先生雲山集』卷三第四七葉裏、卷四第四〇葉裏、卷五第五五葉裏。
- (19) 李紅英編『寒雲藏書題跋輯釋』下卷、六二二―六二二六頁、中華書局、二〇一六年。
- (20) 卷四 (http://rbook.ncl.edu.tw/NCLSearch/Search/SearchDetail?item=ea554dba975487b567d0259ebc1676fdg20TFexNQ2&page=&whereString=&sourceWhereString=&SourceID=0&HasImage=) 卷四 (http://rbook.ncl.edu.tw/NCLSearch/Search/SearchDetail?item=d51c2d56b9f5449fb62e42e2ed58642bfdg20TFexNg2&page=&whereString=&sourceWhereString=&SourceID=0&HasImage=)
- (21) 高橋智「京師圖書館善本簡明書目・稿本について―中國版本學資料研究―」二一―三頁。
- (22) 姬志真『雲山集』「道藏」二五冊三六四頁。
- (23) 姬志真『雲山集』「道藏」二五冊三六四頁。
- (24) 姬志真『知常先生雲山集』卷五、第五一―五二葉。
- (25) 張廣保「全真敎史家姬志真及元仁宗延祐六年《雲山集》の史料價值」一〇四―一〇六頁。

On the Quanzhen Taoist Ji Zhizhen (姬志真)'s  
*ZHICHANGXIANSHENG YUNSHANJI* (知常先生雲山集)

WAKIYAMA Gō

Ji Zhizhen was a Taoist of the Quanzhen school who was active in 13th-century China during the rule of the Jin Dynasty and the Mongol Empire. As the first leader of the Hao Datong-Wang Zhijin school, he had great influence in the Henan region. His work “YUNSHANJI” is included in “DAOZANG” and is relatively well-known, but there is a version not included in “DAOZANG” called “ZHICHANGXIANSHENG YUNSHANJI.” This version contains references not found in the “YUNSHANJI” included in “DAOZANG” and is of great importance in the history of Taoist thought, as its teachings show continuity with Taoism of the Song and Jin dynasties and the influence of Zhu Zi studies. Despite its importance, however, it has not received much attention in Japan, nor has it been sufficiently studied in mainland China. This paper aims to provide bibliographical information on the ZHICHANGXIANSHENG YUNSHANJI. It described not only the differences between the ZHICHANGXIANSHENG YUNSHANJI and the YUNSHANJI in DAOZANG, but also the history of its formation and transmission. The YUNSHANJI was first published in 1250 under the name ZHICHANGXIANSHENGWENJI by Lun Boyu, a friend of Ji Zhizhen, with an introduction by Pei Xian in 1250. In 1265, Wang E gave it a preface and the name “YUNSHANJI”, and it was subsequently published. The existing Yuan dynasty edition of ZHICHANGXIANSHENG YUNSHANJI was reprinted in 1319 by Sun Lüdao, the fourth leader of the Hao Datong-Wang Zhijin school, and his subordinate Xing Daozheng. It was originally housed in the Cabinet archive during the Ming and Qing dynasties, and was discovered in 1912 and acquired by Zhang Yu. It then passed through the hands of Yuan Kewen and Pan Zongzhou before finally being donated to the National Library of China in 1951. As a supplementary note, this paper also introduces the existence of a previously unknown Ming-abstracted copy of “ZHICHANGXIANSHENG-YUNSHANJI” in the National Library of Taiwan.